

動きはじめた、 持続可能な未来への ESD 評価手法

文：永田佳之（聖心女子大学准教授）

ACCUは、当事者以外の部外者が価値判断を下すような手法の対極にある、「評価者—被評価者」という垣根を超えた、HOPE*評価を創案しました。実施された「ESDイノベーション創成プロジェクト」のうち、アジア太平洋の7カ国の事業を対象に、多国籍チームによるHOPE評価ミッションが試されました。

新たな教育ビジョンとしての ESD

国連「ESDの10年」の中間年を迎え、各国で評価が盛んに行われるようになりました。この節目の年に、いまいちど確認しておきたいことは、ESDは教育の新たなビジョンとして生まれた概念であるということです。地球温暖化や世界同時不況など、現在のような持続不可能な社会が形成される上で、少なからぬ影響を及ぼしてきた伝統的な教育を根底から問い直す使命をESDは帯びています。

教育を根幹から捉え直すことがESDに期されるのであれば、その評価も従来の評価観を転換するような性格であってしかるべきです。そうした考えのもと、昨年、ACCUは「ESD評価手法開発ワークショップ」を開催し、持続可能な社会に向けた評価のあり方を吟味し、HOPEアプローチを創案しました。

7カ国で試行された HOPE 評価

パラオでの評価活動を皮切りに、1)インドネシアとマレーシア、2)タイとブータン、3)モンゴルとベトナムの3ルートに分けて、3つの多国籍チームが文字どおり、野を越え山を越え、奥地の学校や学び舎を訪ね、学習者の声に耳を傾けました。インタビューした村人等は400名近くに及び、50時

間ほどの記録に収められました。グループや個人を対象としたインタビューをひととおり終わると、公開フォーラムが開催され、評価内容に対する現地NGOの職員や学習者の声にふたたび傾聴します。このようにCOE（ESD事業拠点）やACCUの職員、現地NGOスタッフや教師の間で対話のサイクルがくり返しもたれると、持続可能な未来への構想が共有されていくのです。

私は、パラオ（8月17日～22日）、モンゴルとベトナム（9月6日～18日）での評価活動にチームリーダーとして参加する機会に恵まれました。各地でのインタビューで貧困家庭の親子や小中学校を中途退学した生徒、少数民族や障害者の親達が語るストーリーを聴いて、ACCUの国際協力が持続不可能な状況下に置かれた人々の希望につながっていることを確信しました。パラオでは外国人労働者の移住により職を得られなくなった若者に対する職業教育が、モンゴルでは野菜不足による国民の健康維持の困難な状況に対する健康教育が、ベトナムでは家庭内にこもりがちな障害児の家庭に対する初期介入を促す教育が多くの笑顔を生み出していたのです。

HOPEアプローチの底流にあるもの

ともすると高みから専門家が物申すことになりがちなのは人々を萎縮

させます。一方、HOPE評価には正反対の効果が見られます。関係者の誰もが元気になるのです。ここでいう関係者とは、現地NGOや行政官、学習者などのプロジェクトに携わる利害関係者（ステークホルダー）を指しますが、こうした人々が「利害」という言葉が似合わないほどに、共通の問題に対して知恵を出し、励まし合う営みがHOPE評価の真髄と言えましょう。

教材づくりを通じたACCUの国際協力をひと言で表わせば、「わかりやすい、おもしろい、ためになる」となる、と聞いたことがあります。それは、私たち一人ひとりに宿された本質の部分にくすぐり、〈いのち〉を躍動させるようなミッションと言えるでしょう。今回の評価活動を通して、HOPEにも、人間の内発的な成長に対する信頼のようなものが息づいているように思いました。ACCUが長い年月をかけて醸成してきた「文化」は持続不可能な時代状況において失ってはならない貴重な財産である—こうしたことへの気づきも今回の旅の収穫でした。

（写真は筆者提供）

* Holistic Participatory Empoweringの略。詳しくは、ACCU Newsの370号p.10参照。



障害児をもつ家庭でのインタビュー（ベトナムと中国の国境近くの村）



ベトナムでの公開フォーラム